

中等部第2回

国語

令和4年2月2日実施

50分

2022年度

〔受験上の注意〕

- 一、問題は〔一〕・〔二〕があります。
- 二、解答時間は五十分です。
- 三、解答用紙はこの冊子の最後にあります。
キリトリ線より切りはなしてください。
- 四、問題用紙・解答用紙の所定のところに書いて
記入してください。

受験番号	氏名

〔一〕 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、設問の都合上、本文には表記を変えたり省略したりした部分があります。

崎谷夏美は四十歳、出版社に勤めている。二年前の出産後、突然、育児を理由に雑誌編集部から資料部に異動になった。必死に働いてきた自分を用済みだと言われたようで絶望し、他社の編集部への転職を何度も考えながら、行動に移せないでいた。以下は、『月のとびら』という本との出会いをきっかけに、他社の中途採用に応募したが不採用となり落ち込んでいた夏美が、誕生日に家族（夫の修二・娘の双葉）とファミレスで夕食をとっている場面である。

フリードリンクのハーブティーを淹れなおして席に座ると、テーブルに置いていた私のスマホが振動した。090で始まる知らない携帯番号からの電話だ。

私は修二に目配せして席を立ち、店の外で電話に出る。

「ZAZの桐山です」

「ああ」

親しげな声に、私は安堵の息をもらす。夏の夜風が気持ちいい。

「ご注文のコンタクトレンズが届きました。お待たせいたしました」

「取りに行きます。ありがとうございます」

「と、いうのは表向きの口実なんです」

「え？」

なんだか電話の向こうがざわざわしている。お店からかけているのではなさそうだった。そもそも、携帯番号だったし。

桐山くんは一呼吸おいてから言った。

「崎谷さん、[※]桜桃社の結果、出ました？」

「……だめでした」

「そうか、よかった」

「よかった？」

思わず訊き返すと、桐山くんは「あ、いえ、すみません」と苦笑した。^①

「僕の大学時代の先輩で、メイプル書房の文芸編集部で働いている女性がいるんですけど」

メイプル書房。絵本や児童書で有名な出版社だ。『はだしのゲロブ』もここから出ている。

「来月、ご主人の海外赴任に同行するので退職が決まっています、先輩が抜けたぶん中途採用の募集をかけるそうです。でもその前に、もしいい人がいればって話で、それで僕、崎谷さんのこと思い出して」

ドキン、と心臓が大きく震えた。返事もできず握りしめたスマホから、桐山くんの声流れ込んでくる。

「崎谷さんとメイプル書房、合ってると思うんですね。桜桃社みたいな純文学一本の老舗もいいけど、メイプル書房は風通しが良くって新しいことどんどんやっていくやわらかさがあるっていうか。崎谷さんがよろしければ、先輩に話して編集長と一度顔合わせの段取り組みますよ」

「でも私、四十だし、二歳の子どもがいて……」

「うん。そのへんも込みで。小さなお子さんがあるって、絵本や児童書を出してるメイプル書房ならプラスに働くと

思っんです。実際、先輩もママ社員だったし」

^② 胸の高まりが静まらない。その一方で、自分にとって不利なことばかりが頭をかすめる。

「だって絵本の編集なんてまったく経験ないのよ、私」

「文芸編集部と児童書編集部は別です。大人向けのいい小説も、メイプル書房はたくさん出していますよ」

すぐにタイトルは浮かばないけど、たしかにそうだったかもしれない。それなら……それなら、私も一般文芸を作ることができるとだろうか。

「崎谷さん、ミラにいたとき、ファッションじゃなくて女の子の心に寄り添うような企画をたくさん出してたじゃないですか。明日もがんばろうって元気が出るページ。だから僕、ピンブラは崎谷さんが担当だから生まれた小説だと納得したし、文芸編集やりたいって言ってるの聞いて嬉しかったんです」

そんなふうに言われて、^③救われる想いがした。見ていてくれた、認めてくれていた人がちゃんと近くにいたんだ。喜びを隠せないまま、私は訊ねる。

「桐山くん、どうして私にこんなことまでしてくれるの？」

単純な疑問だった。私は彼にとって友人でもないし、^(a)オンがあるわけでもない、^(b)ちょっとしたムカシの仕事仲間だ。桐山くんは特に考える様子もなくさらりと答えた。

「どうしてって、この流れに居合わせたからっていうか。だって、世の中におもしろい本が増えたらいいじゃないですか。僕も読みたいです」

私は地面に視線を落とす。サンダルを履いた足が震えていた。

あらためてこちらから連絡れんらくすると言って桐山くんの電話を切ったあと、私は [X] 席もとに戻り、ハーブティーを一気に飲んだ。

「どうしたの」

修二が訊ねる。私は事の次第しだいを説明した。

「いい話じゃん！」

修二はそう言った。わかっている。でも私は怖気おしげづいている。いい話すぎるのだ。やっと気持ちが安定しかけてきたのに、ここで期待して、もしダメになったらキズ(c)が深まる。

「こんなことって、ある？ なんだかできすぎじゃない？ 向こうからこんな話がくるなんて」

そう言う私を、修二は真剣しんけんな表情でじっと見た。

④「それは違うよ。向こうから勝手にやってきたうまい話じゃなくて、夏美が動いたから、周りも動き出したんだ」

はつと顔を上げる。修二はやわらかくほえんだ。

「自分でつかんだんだろ」

ああ、そうだ。

不採用になった桜桃社。でもあそこを受けようとしなければ、桐山くんに文芸編集をやりたいと伝えることもなかっただろう。私の起こした点が、予想もできない場所につながったんだ。思いつきもしない、嬉しいサプライズ。

アイスクリームを食べ終わった双葉の頭に、修二がぼんと手を置いた。

「じゃあ、ふーちゃんはお父さんと先におうち帰ってような」

「え？」

「本屋に行きたいんだろ、夏美。駅前ならまだ開いてるよ」

双葉が [Y] 私たちふたりを見ている。

「なあ、ふーちゃん。お母さんが、欲しいものがあるのにガマンして、心の中でエンエンって泣いてたらどうする？」

修二に問いかけられ、双葉は小さく「イヤ」と答えた。

修二と双葉と別れ、私は駅ビルに入っている明森書店めいしんしょてんに足を運んだ。メイプル書房が発行している本を探す。絵本。童話。児童書。そして桐山くんの言ったとおり、ベストセラーになった一般文芸書もたくさん出ていた。

版元をしっかりと確認していなくて気づかなかったけど、私が大好きな小説もいくつかあった。あの本も、あの本も。私はすでに、メイプル書房の本を何冊も読んでいたのだ。

夢中で棚たなを見て、未読の気になる本をいくつか手に取った。『はだしのゲロブ』も買おう。

そして最後にもうひとつ。『月のとびら』を探した。

あの青い本は見当たらなかった。

そのかわり、同じタイトルのものを見つけた。『新装版 月のとびら』とある。

※瀟しょうしゃ洒しゃな月のイラストが全面えがに描かかれた装丁※。下に向かつて紺色こんいろから黄みがかっていくグラデーション。表紙を開いたところの見返しは闇やみのような漆黒しつこくではなく、 [Z] 明るいカナリヤイエローが広がっている。ページをめくってみると、文章の内容はほぼ同じものようだった。

リニューアル発売。求められ、愛されている本だという証拠しやうこだ。

⑤ 熱いものがこみあげてくる。本もこうやって、生まれなおすことがあるのだ。どんな人がこれを手にし、何を受け取るのだろうか。

ああ、私は本を作りたい。

明日が少し楽しみになるような、自分の知らない気持ちと向き合えるような、そんな本を世に出したい。それは形が変わっても、ミラにいるときと同じ想いだった。

読んでいるあいだ夜空を美しく漂うようだった『月のとびら』は、中身は同じままにデザインが一新され、今度は月あかりに照らされているみたいだった。

偶数ページの右上には、月が満ちたり欠けたりしていくマークが描かれている。下にあったのが上に移動したのだ。同じマークなのに、それは空から何かを知らせるような印象が変わった。

私も変わる。同じでいようとしても。

そして志は同じはまだ。どれだけ変わろうとしても――。

(青山美智子 『お探し物は図書室まで』ポプラ社)

※桐山……眼鏡屋の店員。以前は編集プロダクションに勤めていて、夏美が雑誌編集部にいたころ時々仕事を依頼していた。

※桜桃社……夏美が文芸編集部の中途採用に応募した出版社。

※ミラ……資料部に異動になる前、夏美は十五年間「ミラ」という情報誌の編集部にいた。

※ピン普拉……「ピンクのプラタナス」の略。夏美が企画して作家を口説き落とし、「ミラ」で連載された小説。反響を呼

び、大きな文学賞をとるほど話題になった。

※瀟洒……すっきりと洗練されているさま。しゃれているさま。

※装丁……本のデザイン。

問一 線部 (a) (c) のカタカナを、それぞれ漢字に直しなさい。

問二 X Y Z に入れるのに適切な語を次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア ぱつと イ ふらふらと ウ きよとんと エ うつとりと オ てきばきと

問三 線部①「苦笑した。」とありますが、それはなぜですか。もっとも適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 夏美の応募結果が採用か不採用かは今の自分にとってはどうしてもよかったため、つい口をすべらせてしまったことを恥ずかしく思ったから。

イ 不採用という結果は、夏美にとっては残念なことなのに、自分の都合で思わず「よかった」と言ってしまったことを、やや申し訳なく感じたから。

ウ 夏美の桜桃社への応募結果が不採用だったことについて、本心から「よかった」と言ってしまった自分をなんだかおかしく感じたから。

エ 不採用という結果を聞いて思わず「よかった」と言ってしまった自分の発言に対して、夏美が怒らずに対応してくれたことを意外に思ったから。

オ 桜桃社は不採用になると予想したうえでメイプル書房の話をするつもりだったため、早まって発言してしまった自分をにがにがしく思ったから。

問四——線部②「胸の高まりが静まらない。」とありますが、このときの夏美の心情を表す語としてもっとも適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 興奮
- イ 動揺
- ウ 心配
- エ 期待
- オ 驚き

問五——線部③「救われる想いがした。」とありますが、どのようなことですか。説明しなさい。

問六——線部④「それは違うよ。」とありますが、どのようなことですか。七十字以内で説明しなさい。

問七——線部⑤「熱いものがこみあげてくる。」とありますが、ここで夏美の心にこみあげてきたものは何ですか。五十字程度で説明しなさい。

問八 この文章において、リニューアルされた『月のとびら』によってあらわしていることを、夏美（「私」）との関わりをふまえて説明しなさい。

〔二〕 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、設問の都合上、本文には表記を変えたり省略したりした部分があります。

これまでの日本の教育において、このようなエージェンシー、つまり「当事者性」を育てることはあまり重視されてきませんでした。

それゆえでしょうか。たとえば、二酸化炭素が増え、温暖化が進んでいるデータがたくさん出ているにもかかわらず、ジッサイにはなかなか削減が進みません。カーボンフリー（脱炭素化）やカーボンニュートラル（温室効果ガスの排出を全体としてゼロに）と言い始めたのもつい最近のことです。

その理由として、「」「」「私がやらなくても誰かがやってくれる」などのように、一人ひとりが自分が当事者だと認識できていないということがありました。

しかし、全体が上手に共生し合わない限り「個」はありません。それぞれが生きる論理を尊重し合うことを共生と言いますが、自分を大事にしようとしたら、自分の周りにはいるあらゆる存在が、それぞれの論理で生きていることを尊重する必要があります。それによって初めて支え合いが生じます。自分を大事にするためには、自分のことだけではなく、自分の周りにはいる生き物全体を大切に、応援しなければなりません。

このような考え方を、ホーリズム^①と言います。人間はこれまで、森林を伐採するときそこに棲んでいる虫など気にしませんでした。しかし、森の動物も、鳥も、虫も、その生態系に暮らし、お互いに棲み支え合う関係です。それらすべてが森という「全体」（ホール）を構成しているのです。

いま、世界中で山火事が多発していますが、そのニュースを見てみなさんは何を考えますか。「人間にとって役に

立つ木がなくなってしまう」としか考えないとしたら、それは、いかにも二〇世紀的な思考です。山火事が起こったとき、私たちがシンコクに考えなければならぬのは、「森にいる動物たちはどうやって暮らしているんだろう」^(b)「止まる木がなくなったら鳥たちはどこで寝るだろう」ということです。

山火事によって、広大な森に棲んでいた動物や鳥、虫たちの命は奪われ、棲む場所をなくしてしまいます。火事が終息して森が再生するとき、種を遠くまで運んでくれる鳥がいなくなっていたら、植物は以前のようなスピードでは増えません。

緻密な連鎖で成り立っていた世界が**イツキヨに崩壊してしまうこと**や、そこに自分も含まれていることまでイメージして、全体を考えることができるか。これからはこのようなエージェンシーが重要になっていきます。

先にお話しした「VUCAの時代」、つまり「予測困難で不確実、複雑で曖昧」な時代に向けて、これから何を教えるか、どう学ぶかと考える前にもう一つ大事なことがあります。それは、**マインドセットをどう組み替えていくか**です。

二〇世紀的な思考のしかたはもう限界です。世界で次々に起こる問題を解決できないのはなぜか。それは、その問題をつくってしまった時代の思考の**枠組みと変わらない思考の枠組みで問題を解決しようとする**からです。つまり、自分たちの「思考のしかた」や「その思考に基づく行動」が**大きな問題をばらんでいたことに関心が向いていなかった**ということなのです。

出てきた問題に**モグラ叩きのように対処している**だけでは根本的な解決はできません。出てくるモグラを叩くのではなく、**モグラが出てこないためにはどうすればいいかを考える**、**そういう思考の枠組みを身につける**必要があります。③
す。古い世代が次の世代に「私たちはこんな枠組みで思考してきたから、君たちも同じように考えなさい」と伝えるも、意味がありません。

人類の長い歴史の中で、**アインシュタイン (Einstein) を始め多くの哲学者や発明家、時代を牽引した人たちが繰り返し**④言ってきたことですが、古い思考の枠組みで考えても、新しい問題は解決できないのです。

実はどんな時代でも、どんな人でも、無意識のうちに、ある前提的な枠組みや色眼鏡でものをしています。「これはこういうものだ」「これが常識だ」という思い込みや価値観を通して物事や世界を見ている。そのことをまず自覚することが大事です。

とはいえ、ある価値観や認識の枠組みから全く自由になって認識したいと思っても、それはできません。人間は何かの眼鏡をかけないと世界が見えないのです。だからこそ、前提的な枠組みや色眼鏡を一度全てチェックし直して、何が大事で何が大事じゃないかを見極めること、マインドセットを切り替えることが必要です。

(汐見稔幸『教えから学びへ 教育にとって一番大切なこと』河出書房新社)

※マインドセット……ものの見方、考え方。

※はらんでいた……内部にふくんで持っていた。

※牽引……先頭になってある事態を導き起こすこと。

問一 ――――線部 (a) (c) のカタカナを、それぞれ漢字に直しなさい。

問二 X・Yに入れるのにもっとも適切な文を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。ただし、順番は問
いませぬ。

- ア みんなにとつて快適で便利な社会のためにはしかたがない
- イ 私だけ頑張っても大して変わらない
- ウ 環境破壊は知識として知ってはいるけどよくわからない
- エ 地球の環境は私たちの行動次第で改善することができる
- オ 家族といっしょにできることから取り組んでいる

問三 ——線部①「ホーリズム」とありますが、これはどのような考え方ですか。この形式段落の「森」の例を参
考にして、七十字以内でまとめて答えなさい。

問四 ——線部②「いかにも二〇世紀的な思考です。」とありますが、この表現から読み取れることとしてみっと
も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 山火事が起きると、木々だけでなく森に生きる全てのものに影響が生じることに気づかず、人間の都
合ばかりを考えていることを批判している。
- イ 経済発展をとげるためには、森林を伐採して多くの木材を確保することが大事であったという二〇世
紀の古い価値観を指摘している。
- ウ この世に存在する全てのものを、人間にとつて有用かそうでないかということだけで判断しており、
無用なものの価値を認めない姿勢を否定している。
- エ 山火事が起こったときに本来考えるべきことは、その森に暮らす動物たちの命やその後の生活を守る

方法であるということを強調している。

- オ 山火事による被害が多発した二〇世紀に、森の再生スピードを落とさないように、成長が早くて扱
やすい木が植えられていたことを非難している。

問五 ——線部③「そういう思考の枠組み」とありますが、どのようなことですか。本文中の言葉を用いて五十五
字以内で説明しなさい。

問六 ——線部④「古い思考の枠組みで考えても、新しい問題は解決できないのです。」とありますが、「新しい
問題を解決」するためには、どのようなことが必要だと筆者は述べていますか。八十字以内で説明しなさい。

国語解答用紙(第二回)

キリトリ線

〔一〕

問八			問七			問六			問五		問三	問二	問一
												X	(a)
										問四	Y	(b)	
											Z	(c)	
			50		70								
40		20											

〔二〕

問六				問五			問四	問三			問一	
												(a)
											(b)	
												(c)
				50			70					問二
80		60		40		20						

総 点
科 目
国語
受験番号
氏 名

(注意) 字数に制限があるときは「・」「や」「も」一字としてます。

